
SMPL 開始観測値 ID 最終観測値 ID
[開始観測値 ID 最終観測値 ID,] ;
SMPL SMPL ベクトル名 ;

機能 :

SMPL は、以後の TSP プロシジャーで用いられるデータの観測値を定義するのに用います。SMPL ベクトルは、現在の標本内にある観測値の範囲を決める、ペアになった観測値 ID のグループです。

使用法 :

観測値の抽出は次の 4 通りの方法でおこなえます :

1. 観測値の開始期と最終期のペアのある SMPL ステートメントによって
2. ペアにした観測値 ID の SMPL ベクトルを含んでいる変数名のある SMPL ステートメントによって
3. SMPL のなかに含まれている観測値に対しては真になるような式で SMPLIF ステートメントによって
4. SELECT ステートメントによって (現在のサンプルでなしに以前の SMPL ステートメントでサンプルを選択する以外は、SMPLIF と同じです)。

最初のは最も普通の使い方です : SMPL ステートメントのもっとも簡単な形で、連続する観測値グループを決めます。例えばデータの観測値 1 から観測値 10 を使いたいときには、次のコマンドを用います。

```
SMPL 1 10 ;
```

一つ以上の観測値グループを使いたいときは、SMPL ステートメントに順にグループをかきます。例えば、次の SMPL は観測値 11 を除きます :

```
SMPL 1,10,12,20 ;
```

SMPL ステートメントでの観測値の ID は文法にあった観測値 ID なら使えます :

- 期種が NONE なら単純な整数。
- 期種が 年次 なら年。もし年が 201 より小さく 0 よりも大きいなら、1900 が自動的に加えられます。これは BASEYEAR=オプションで置き直すことができます (詳細は OPTIOS コマンドの項を参照)
- 期種が 月次または四半期 なら、年の次にコロンの、そして期。

SMPL は TSP プログラムのなかでいつでも変えることが出来ます。SMPL が有効な間は SMPL 外にある系列の観測値は、ラグ (あるいはリード) と共に指定され、ラグ (リード) 値が標本内になければ保存されないし、検索できません。例えば、標本が 48 から 72 で、変数 GNP(-1) が与えられていると、GNP の 1947 年の値は 1948 年に正しく入力されます。

例：

```
FREQ A ;
SMPL 56,80 ;
SMPL 21,40,46,82 ;
FREQ Q ; SMPL 72:1,82:4 ;
FREQ M ; SMPL 78:5,81:9 ;
FREQ N ;
SMPL 2,7 9,14 16,21 23,28 30,35 ;
```

最後の例は、最初から始めて7つめ毎の観測値を飛ばして6つの観測値を一つのグループとしています。これはラグ付き内生変数がある場合のパネルデータに対してよく行う例です。

SAMPLE というベクトルに、2,7,9,14,16,21,23,28,30,35 が入力されているとします。このとき最後の例は、次のようにしても行うことができます。

```
SMPL SAMPLE ;
```

SMPL のペアは、各ペアが正の範囲を採る限りどのような順にも置くことができます。これは保存されているのと違った順でデータを入力するのに使うことができます。この例としては、アルファベット順の州を一つのデータ・ソースとし、別のデータ・ソースでは地域別にグループ化されている州データを考えます。アルファベット順のデータでは SMPL 1,50 ; を使うでしょうし、地域別データでは、SMPL 33,33 21,21 14,14 17,17 49,49 20,20 ... etc を使うでしょう。

アウトプット：

SMPL を変えるたびに、プログラムの前の方で SUPRES SMPL ; としていない限り、TSP は現在のサンプルをプリントします。サンプルベクトルもまた @SMPL の名前でデータ領域に保存されます。現在のサンプルでの観測値数は @NOB の名前でスカラーとして保存されます。これは、例えば SMPLIF とか SELECT コマンドで正確にいくつ観測値を採ったか分からないときにはきわめて便利です。